Osaka Shoin Women's University Repository

『太平記』巻七の構成と展開

谷垣　伊太雄

一

元弘三年（一三三三）、後醍醐天皇不在の畿内においては、楠正成・大塔宮護良親王を核として、〝討幕〟の火が消えずに燻り続けていた。鎌倉幕府は、それらの動きを皆滅させるために大軍を派遣する。『太平記』が、巻六から巻七にかけて採り上げるのは、畿内を中心とする合戦の経過と、巻四末尾に隠岐への配流が記されて以来、舞台から姿を消していた後醍醐天皇の再登場とであり、短く語られる新田義貞の動向は、やがて巻十で詳述される事となる。

本稿で扱う巻七の章立[注1]では次の通りである。

一、吉野城軍事
二、千剣破城軍事
三、新田義貞賜綸旨事
四、赤松蜂起事
五、河野謀叛事
六、先帝船上臨幸事
七、船上合戦事

巻六第五章「関東大勢上洛事」に「元弘三年正月晦日、諸國ノ軍勢八十萬騎ヲ三手ニ分テ、吉野・赤坂・金剛山、三ノ城ヘゾ被レ向ケル」とあって、詳細が語られなかった「吉野」方面への攻撃が、「元弘三年正月十六日（右の巻六の引用文から考えても、ここは「二月」とあるべきところ――筆者注）、二階堂出羽入道道蘊、六萬余騎ノ勢ニテ大塔宮ノ籠ラセ給ヘル吉野ノ城ヘ押寄ル」との一文とともに、巻七第一章において採り上げられる。巻五の末尾で「吉野ノ大衆ヲ語ハセ給テ、安善寳塔ヲ城郭ニ構ヘ、岩切通ス吉野河ヲ前ニ當テ、三千余騎ヲ隨ヘテ楯籠ラセ給ケルトゾ聞ヘシ」と記された大塔宮への攻撃が、漸く巻七で語られる事となる。

Osaka Shoin Women's University Repository

吉野城についての「菜摘河ノ川淀ヨリ、城ノ方ヲ向上タレバ、嶺ニハ白旗・赤旗・錦ノ旗、深山下嵐ニ吹ナビカサレテ、雲歟花歟ト怪マル。麓ニハ數千ノ官軍、冑ノ星ヲ耀カシ鎧ノ袖ヲ連ネテ、錦繡ヲシケル地ノ如シ。峯高シテ道細ク、山嶮シテ苔滑ナリ。サレバ幾十萬騎ノ勢ニテ責ル共、輒ク落スベシトハ兒ヘザリケリ」という叙述は、巻三における笠置城についての「山高シテ一片ノ白雲峯ヲ埋ミ、谷深シテ萬仞ノ青岩路ヲ遮ル。攀折ナル道ヲ廻テ揚ル事十八町、岩ヲ切テ堀トシ石ヲ疊デ屏トセリ。サレバ縱ヒ防ギ戦フ者無トモ、輒ク登ル事ヲ得難シ」という叙述と類似する形の、攻撃側からの視点に基づくものであり、大軍によっての正面攻撃の難しさを描いている。

そのため、「此山ノ案内者トテ一方ヘ被」向タリケル吉野ノ執行岩菊丸」の「城ノ後ノ山金峯山」よりの百五十騎による奇襲攻撃案が採用される事となり、岩菊丸は、巻三における陶山一族と同様に、城側の隙をついて敗北へと追い詰める役割を果たす。ただ、笠置城での後醍醐天皇が実戦に関与しない存在であったのに対し、吉野城における大塔宮は、「今ハ遁レヌ處也ト思食切テ」敵陣に駆け入り奮戦する存在であったために、敗戦後の展開に差違が生じる。「最後ノ御酒宴」に臨んだ大塔宮は、「御鎧ニ立所ノ矢七筋、御頬サキニノ御ウデ二箇所ツカレサセ給テ、血ノ流ル、事瀧ノ如シ」という有様であり、「敵ノ頸ヲサシ貫テ」参上した木寺相模が舞を披露する。続いて村上彦四郎義光が「鎧ニ立處ノ矢十六筋、枯野ニ殘ル冬草ノ、風ニ臥タル如クニ折懸」て参候し、「此城ニテ功ヲ立ン事、今ハ叶ハジト覺ヘ候」と述べ、「一方ヨリ打破テ、一歩落テ可」有二御覧一」と提案し、「恐アル事ニテ候ヘ共、メサレテ候錦ノ御鎧直垂ト、御物具トヲ下給テ、御諱ノ字ヲ犯シテ敵ヲ欺キ、御命ニ代リ進セ候ハン」と、自ら大塔宮の代役となる事を主張する。「爭デカサル事アルベキ、死ナバ一所ニテコソ兎モ角モナラメ」と答える大塔宮に対し、村上義光は「言バヲ荒ラカニシテ」「是程ニ云甲斐ナキ御所存ニテ、天下ノ大事ヲ思食立ケル事コソウタテケレ。ハヤ其御物具ヲ脱セ給ヒ候ヘ」と述べて大塔宮の鎧の上帯を解いたため、大塔宮も鎧などを脱ぎ替え「我若生タラバ、汝が後生ヲ訪ベシ。共ニ敵ノ手ニカ、ラバ、冥途マデモ同ジ岐ニ伴フベシ」と落涙しつつ「勝手明神ノ御前ヲ南ヘ向テ」落ちて行く。その後で高櫓に昇った義光は、大塔宮を名乗って「鎧ヲ脱デ櫓ヨリ下ヘ投落シ、錦ノ鎧直垂ノ袴許ニ、練貫ノ二小袖ヲ押膚脱デ、白ク清ゲナル膚ニ刀ヲツキ立テ、左ノ脇ヨリ右ノソバ腹マデ一文字ニ掻切テ、腸摑デ櫓ノ板ニナゲツケ、太刀ヲ口ニクワヘテ、ウツ伏ニ成テ」凄絶な最期を遂げた。

巻二において、後醍醐天皇の代役を叡山に赴かせる事を提案したのは大塔宮であったが、巻七では、自ら代役を申し出た村上義光を犠牲とする事によって、大塔宮は辛うじて危地を脱するのである。更に、「南ヨリ廻リケル吉野ノ執行ガ勢五百余騎」が「多年ノ案内者ナレバ、道ヲ要リカサニ廻リテ、打留メ奉ン」とした場面では、「村上彦四郎義光が子息兵衛藏人義

Osaka Shoin Women's University Repository

義光カ一鎧ニ立處ノ矢十六筋　相野ニ殘ル冬草ノ　原ニ臥

隆」が登場する。父とともに自害しようとしたが、父から「且ク生テ宮ノ御先途ヲ見ハテ進セヨ」と諭されたために「力ナク且クノ命ヲ延テ」大塔宮に随行していた義隆は、五百余騎の敵を相手に奮戦し、最後は自害して果てる。

結局、大塔宮は、村上父子の犠牲と引き替えに、天河から高野山へと落ち延びる事ができた。一方、代役となった村上義光の首を大塔宮と信じ、六波羅に送っての首実検の結果「アリモアラヌ者ノ頭也」と判定された二階堂道蘊は、「猶安カラズ思テ」高野山へ押し寄せる。しかし、「一山ノ衆徒皆心ヲ合テ宮ヲ隠シ奉」ったため「數日ノ粉骨甲斐モナクテ」千剣破城へと移動する。

第二章は、「前ノ勢八十萬騎」(巻六に「諸國ノ軍勢八十萬騎ヲ三手ニ分テ」とあった事との混同か。巻六では「金剛山ヘハ陸奥右馬助、搦手ノ大將トシテ、其勢廿萬騎」とあり、大手に向かった長崎悪四郎左衛門尉の勢も十数万騎であった)に「赤坂ノ勢」(巻六に「赤坂ヘハ阿曾彈正少弼ヲ大將トシテ、其勢八萬余騎」とあった)と「吉野ノ勢」(前章に「六萬余騎」とあった)とが加わって「百萬騎」を越えた「千劔破ノ寄手」について「城ノ四方二三里ガ間ハ、見物相撲ノ場ノ如ク打囲デ、尺寸ノ地ヲモ餘サズ充滿タリ」と描かれる。

旌旗ノ風ニ翻テ靡ク氣色ハ、秋ノ野ノ尾花ガ末ヨリモ繁ク
劔戟ノ日ニ映ジテ耀ケル様ハ、暁ノ霜ノ枯草ニ布ルガ如ク
也

大軍ノ近ヅク處ニハ、山勢是ガ為ニ動キ
時ノ聲ノ震フ中ニハ、坤軸須臾ニ摧ケタリ

と、対句表現によって大軍の有様を叙述した後に、城側の楠正成について「此勢ニモ恐ズシテ、纔ニ千人ニ足ヌ小勢ニテ、[注2]誰ヲ憑ミ何ヲ待共ナキニ、城中ニコラヘテ防ギ戦ケル楠ガ心ノ程コソ不敵ナレ」と紹介する。尨大な数の攻撃側について華麗に描写すればするほど、傍点部分に見られる如く、それとは対照的な小勢の楠正成は、戦うとすれば、「不敵[注3]」な「心ノ程」だけが、その落差を埋めるものとなる。

実際の合戦場面を追ってみよう。「此城東西ハ谷深ク切テ人ノ上ルベキ様モナシ。南北ハ金剛山ニツヾキテ而モ峯絶タリ」と、楠側にとって有利な紹介をしたあとに「サレドモ高サ二町許ニテ、廻リ一里ニ足ヌ小城ナレバ」という否定的説明を連接させる。ただ、寄手が「何程ノ事カ有ベキ」と「是ヲ見侮テ」攻撃を仕掛けたのに対し、楠側は「少シモサハガズ、靜マリ歸テ、高櫓ノ上ヨリ大石ヲ投カケ〳〵、楯ノ板ヲ微塵ニ打碎テ、漂フ處ヲ差ツメ〳〵射」たために、寄手の死傷者は「一日ガ中ニ五六千人ニ」達した。

数日後、「赤坂ノ大將金澤右馬助」が、赤坂城攻略の体験に基づいて「東ノ山ノ麓ニ流タル溪水ヲ、夜々汲歟ト覺テ候」と推

Osaka Shoin Women's University Repository

察し、名越越前守を大将とする三千余騎が派遣され「水ノ邊ニ陣ヲ取セ、城ヨリ人ヲリ下リヌベキ道々ニ、逆木ヲ引テゾ待懸ケル」という作戦がとられる。この作戦は、城側にとっては致命的なものになるはずと見られたが、物語の展開は、右の文章に続けて「楠ハ元來勇氣智謀相兼タル者ナリケレバ」として、「大ナル木ヲ以テ、水舟ヲ二三百打セテ、水ヲ湛置」き「舟ノ底ニ赤土ヲ沈メテ、水ノ性ヲ損ゼヌ樣ニ」した楠正成の「智慮ノ程」が述べられる。そして、その後に、水源警備に派遣された兵達が「始ノ程コソ有ケレ、後ニハ次第々々ニ心懈リ、機緩テ」「用心ノ體少シ無沙汰ニ」なった状況が描かれる。ところが、楠は「是ヲ見スマシテ、究意ノ射手ヲソロヘテ二三百人夜ニ紛テ城ヨリヲロシ」攻勢に出る。そのため、名越越前守は「コラヘ兼テ、本ノ陣ヘ」引き退く。楠側は「捨置タル旗、大幕ナンドヲ取持セテ」「閑ニ城中ヘ」戻る。つまり、金澤右馬助の折角の作戦も、完結されなかったために、楠を追い詰める事ができずに終わる。しかも、戦闘の最先端にいる責任者は金澤右馬助ではなく名越越前守であり、その敗退が次の場面を招来する事となる。

すなわち、「其翌日」楠側は「三本唐笠ノ紋書タル旗ト、同キ文ノ幕」を城に掲げ、「是コソ皆名越殿ヨリ給テ候ツル御旗ニテ候ヘ」等と「同音ニドット笑」う。恥辱を受けた名越勢五千余人は「切岸ノ下迄」攻め寄せるが「岸高シテ切立タレバ、矢長ニ思ヘ共ノボリ得ズ、唯徒ニ城ヲ睨、忿ヲ押ヘテ息ツギ居」たところへ、城中からは「切岸ノ上ニ横ヘテ置タル大木十計切テ落シ」たため、四五百人が圧死し、「シドロニ成テ騒グ」寄手に向かって「十万ノ櫓ヨリ指落シ、思様ニ射ケル間、五千余人ノ兵共殘スクナニ討レ」てしまう。

ここに至って、「尋常ナラヌ合戦ノ體ヲ見テ、寄手モ侮リニク、」思い、「今ハ始ノ樣ニ、勇進デ攻ントスル者モ無」くなった。長崎四郎左衛門尉の提案による兵粮攻めは、攻撃側にとっての第二の良策と思われた。ところが「徒然ニ皆堪兼テ」始めた「一萬句ノ連歌」の発句を長崎師宗が「サキ兼テカツ色ミセヨ山櫻」と詠んだのに対し、工藤高景が「嵐ヤ花ノカタキナルラン」と付ける。「兩句トモニ、詞ノ縁巧ニシテ句ノ體ハ優」と思われたが「御方ヲバ花ニナシ、敵ヲ嵐ニ喩ヘ」た点が「禁忌也ケル表事哉ト後ニゾ思ヒ知レケル」と述べられ、寄手側の敗北が先取りする形で語られてしまうのである。

一応「或ハ碁・雙六ヲ打テ日ヲ過シ、或ハ百服茶・褒貶ノ歌会ナンドヲ翫デ夜ヲ明ス」というような寄手側の態度は、「是ニコソ城中ノ兵ハ中々被」惱タル心地シテ、心ヲ遣方モ無リケル」という効果を引き起こす。しかし、楠正成は「イデサラバ、又寄手タバカリテ居眠サマサン」として「芥ヲ以テ人長ニ人形ヲ二三十作テ、甲冑ヲキセ兵杖ヲ持セテ、夜中ニ城ノ麓ニ立置キ、前ニ疊楯ヲツキ雙ベ、其後ロニスグリタル兵五百人ヲ交ヘテ、夜ノホノ〴〵ト明ケル霞ノ下ヨリ、同時ニ時ヲドツト作ル」という作戦をとり、攻め寄せた寄手に対し、「城ノ兵兼テ巧タル事

Osaka Shoin Women's University Repository

ナレバ、矢軍チトスル様ニシテ大勢相近ヅケテ」人形だけを残して城に引きあげる。「人形ヲ實ノ兵ゾト心得テ」近付いた寄手に対し、正成は「所存ノ如ク敵ヲタバカリ寄セテ、大石ヲ四五十、一度ニバット發ス」。こうして、寄手は又しても多数の死傷者を出し、合戦後に「一足モ引ザリツル兵」が実は「藁ニテ作レル人形」だったと判明し、「唯兎ニモ角ニモ萬人ノ物笑ヒ」となった。

これ以後は「弥合戦ヲ止」めたため「諸國ノ軍勢唯徒ニ城ヲ守リ上テ居タル計ニテ、スルワザ一モ無リケリ」という事になったが、「大將ノ陣ノ前」には「古歌ヲ翻案シテ」包囲軍の無策ぶりを皮肉った狂歌までが立てられた。更に「軍モ無テソゞロニ向ヒ居タルツレ〴〵ニ、諸大將ノ陣々ニ、江口・神崎ノ傾城共ヲ呼寄テ、様々ノ遊」をする。その中で、伯父・甥の間柄の名越遠江入道と名越兵庫助とが、双六の賽の目の事で喧嘩となり、両人は勿論のこと、両人の郎従達二百余人までもが差し違えて死ぬ事件が起こる。城側はそれを見て、「十善ノ君ニ敵ヲシ奉ル天罰ニ依テ、自滅スル人々ノ有様見ヨ」と笑う。この場面では、楠勢の感想をも包含する形の「誠ニ是直事ニ非ズ。天魔波旬ノ所行歟ト覺テ、淺猿カリシ珍事也」という批評が付けられている。

このように、大軍を擁しながら攻めあぐむ寄手のもとに、三月四日鎌倉幕府より飛脚が到着し、「軍ヲ止テ徒ニ日ヲ送ル事不レ可レ然」と伝える。大将達の作戦会議の結果、「御方ノ向ヒ陣ト敵ノ城トノ際ニ、高ク切立タル堀ニ橋ヲ渡シテ、城ヘ打テ入ン」との作戦が決定。「京都ヨリ番匠ヲ五百余人召下シ、五六八九寸ノ材木ヲ集テ、廣サ一丈五尺、長サ二十丈餘ニ梯」を作らせ、「大縄ヲ二三千筋付テ、車木ヲ以テ卷立テ、城ノ切岸ノ上ヘ」倒し懸ける。「早リオノ兵共五六千人」が、この「橋ノ上ヲ渡リ、我先ニト」進み、「アハヤ此城只今打落サレヌト見ヘ」たが、楠正成は「兼テ用意ヤシタリケン、投松明ノサキニ火ヲ付テ、橋ノ上ニ薪ヲ積ルガ如クニ投集テ、水彈ヲ以テ油ヲ瀧ノ流ル、様ニ懸タ」ために、大梯は炎上し、「數千人ノ兵同時ニ猛火ノ中ヘ落重テ、一人モ不レ殘焼死」んでしまう。

更に、「大塔宮ノ命ヲ含デ」集結した七千余人の「吉野・戸津河・宇多・内郡ノ野伏共」が「此ノ峯彼ノ谷ニ立隠テ、千劔破寄手共ノ往來ノ路ヲ差塞」いだため、「諸國ノ兵ノ兵粮忽ニ盡テ、人馬共ニ疲レ」戦線を離脱しようとすると、「案内者ノ野伏共」が待ち伏せて襲撃するので、討たれるか、又は「希有ニシテ命計ヲ助カル者」も「馬・物具ヲ捨、衣裳ヲ剝取レテ」「或ハ破タル蓑ヲ身ニ纏テ、膚計ヲ隠シ、或ハ草ノ葉ヲ腰ニ卷テ、恥アラハセル落人」として「毎日ニ引モ切ラズ十方ヘ逃散」ったのであった。ここでも、この寄手側の有様について「前代未聞ノ恥辱也」との批評が加えられた上に「サレバ日本國ノ武士共ノ重代シタル物具・太刀・刀ハ、皆此時ニ至テ失ニケリ」という、やや誇張気味の付言と「始ハ八十萬騎ト聞ヘシカ共、今ハ纔二十萬余騎ニ成ニケリ」との要約によって、比較的長文の第二章は

Osaka Shoin Women's University Repository

終わる。

新田義貞の幕府への離反が語られる第三章の冒頭は「上野國住人新田小太郎義貞ト申ハ、八幡太郎義家十七代ノ後胤、源家嫡流ノ名家也。然共平氏世ヲ執テ四海皆其威ニ服スル時節ナレバ、無レ力關東ノ催促ニ隨テ金剛山ノ搦手ニゾ被レ向ケル」となっている。この〈源氏〉対〈平氏〉という捉え方は、巻一第一章にも見られた認識であり、新田義貞は鎌倉幕府の体制内における関東武士の勇将として描かれるのではなく、平氏（北条氏）に対抗する源氏嫡流の武士という事に重点を置いて紹介される。それは、新田義貞が執事の船田入道義昌に相談を持ち掛けた「古ヨリ源平兩家朝家ニ仕ヘテ、平氏世ヲ亂ル時ハ、源家是ヲ鎮メ、源氏上ヲ侵ス日ハ平家是ヲ治ム。義貞不肖也ト云ヘ共、當家ノ門楯トシテ、譜代弓矢ノ名ヲ汚セリ。而ニ今相摸入道ノ行迹ヲ見ニ滅亡遠ニ非ズ。我本國ニ歸テ義兵ヲ擧、先朝ノ宸襟ヲ休メ奉ラント存ズルガ、勅命ヲ蒙ラデハ叶マジ。如何シテ大塔宮ノ令旨ヲ給テ、此素懐ヲ可レ達」という言葉にも窺えるものであるが、この言葉には、北条高時の「滅亡遠ニ非ズ」という義貞なりの現実的な予見も含んでの「義兵」への決意が見られる。船田入道は若い郎党三十余人に「野伏」の身支度をさせ、「ドシ軍」を演出、その加勢に来た「宇多・内郡ノ野伏共」を捕えて大塔宮への取次ぎを頼む。大塔宮からは「元弘三年二月十一日」付で「令旨ニハアラデ、綸旨ノ文章」で討幕の要請が届く。義貞は「不レ斜悦デ」「虚病シテ、急ギ本國ヘ」下る。

第三章後半では、千剣破城での寄手の兵の離脱・戦意喪失の雰囲気を打開するため、六波羅から宇都宮公綱が派遣され、紀清両党の千余騎も寄手に加わった事が記される。宇都宮と紀清両党とは、巻六において楠正成から夫々「坂東一ノ弓取」「元來戰場ニ臨デ命ヲ棄ル事塵芥ヨリモ尚輕クス」と評された存在である。従って、この場面でも「未レ屈荒手ナレバ、軈テ城ノ堀ノ際マデ責上テ、夜晝少シモ不レ引退、十余日マデゾ責タリケル」という戦いぶりと、楠側の「城モ少シ防兼タル體ニゾ見ヘタリケル」という対応ぶりとが描かれる。しかし、攻防の決着までは記されず、「サレ共、紀清兩黨ノ者トテモ、斑足王ノ身ヲモカラザレバ天ヲモ翔リ難シ。龍伯公ガ力ヲ不レ得バ山ヲモ擘難シ」として「後ナル者ハ手々ニ鋤・鍬ヲ以テ、山ヲ掘倒サン」と企て「大手ノ櫓ヲバ、夜晝三日ガ間ニ、念ナク掘リ崩シ」た事、ただ「諸人是ヲ見テ」「我モ〳〵ト掘ケレ共、廻リ一里ニ餘レル大山ナレバ左右ナク掘倒サルベシトハ見ヘ」なかったという戦況説明で、この章は終わる。

第四章は、巻六で大塔宮の令旨を受けて挙兵が記された赤松一族の漸進的な動きが述べられる。赤松円心は「楠が城強クシテ、京都ハ無勢也」と知り、「播磨國苔縄ノ城ヨリ打テ出デ、山陽・山陰ノ兩道ヲ差塞ギ、山里・梨原ノ間ニ陣ヲト」ったが、「六波羅ノ催促ニ依テ上洛」する備前・備中・備後・安芸・周防の

Osaka Shoin Women's University Repository

勢を船坂山で防ぎとめた赤松貞範が、生捕りした二十余人の敵を情深ク相交」った事で、伊東大和二郎は「其恩ヲ感ジテ、忽ニ武家與力ノ志ヲ變ジテ、官軍合體ノ思ヲナシ」「先己ガ館ノ上ナル三石山ニ城郭ヲ構ヘ、軈テ熊山ヘ取上リテ、義兵ヲ揚タ」ため、それと戦い敗れた備前守護加治氏は児島へ退く。「西國ヨリ上洛スル勢ヲバ、伊東ニ支ヘサセテ、後ハ思モ無」くなった赤松は「兵庫ノ北ニ當テ、摩耶ト云山寺ノ有ケルニ、先城郭ヲ構」える。

第五章。六波羅が「今ハ四國勢ヲ摩耶ノ城ヘハ向ベシ」と評定していた所へ、その四国の伊予国から早馬が到着。土居二郎・得能弥二郎が「宮方ニ成テ旗ヲアゲ、當國ノ勢ヲ相付テ土佐國ヘ打越」え、合戦した長門探題上野介時直の勢が敗北し、時直父子が行方不明になったこと、「其ヨリ後四國ノ勢悉土居・得能ニ属スル間、其勢已ニ六千余騎、宇多津・今張ノ湊ニ舟ヲソロヘ、只今責上ント」しているので「御用心有ベシ」と伝えて来た。(注4)

二

第六章は「畿内ノ軍未ダ靜ナラザルニ、又四國・西國日ヲ追テ亂ケレバ、人ノ心皆薄氷ヲ履デ國ノ危キ事深淵ニ臨ガ如シ」と、現況を要約した上で、目を隠岐島に転じる。大塔宮・楠正成を打倒できぬばかりでなく、赤松や土居・得能を制御できない幕府・六波羅にしてみれば、やはり、それらの勢力の〈原点〉とも言うべき「先帝（後醍醐天皇）」に注意を払わざるを得ない。隠岐判官佐々木清高のもとに「抑今如レ斯天下ノ亂ル、事ハ偏ニ先帝ノ宸襟ヨリ事興レリ。若逆徒差チガフテ奪取奉ントスル事モコソアレ、相構テ能々警固仕ベシ」と命令があり、厳重警戒態勢がとられる。

ところが閏二月下旬、中門の警固役に当たった佐々木富士名判官義綱は「如何ガ思ケン、哀此君ヲ取奉テ、謀叛ヲ起サバヤト思心」を抱く。官女を介して本土の現状を説明した上で「御聖運開ベキ時已ニ至ヌトコソ覺テ候ヘ」として、主上（後醍醐天皇）に隠岐脱出を勧める。主上は「猶モ彼偽テヤ申覧」と思い、「義綱ガ志ノ程ヲ能々御覧ゼラレン爲ニ、彼官女ヲ義綱ニ被レ下」た。「面目身ニ餘リテ覺ケル上、最愛又甚シカリケレバ、弥忠烈ノ志ヲ顯シ」た義綱は、「サラバ汝先出雲國ヘ越テ、同心スベキ一族ヲ語テ御迎ニ參レ」との命令に従って出雲国に渡る。ところが相談を持ち掛けられた塩冶判官は「如何思ケン、義綱ヲヰコメテ置テ」隠岐へ帰さなかった。主上は義綱が戻って来ないため「唯運ニ任テ御出有ント思食テ」「三位殿ノ御局ノ御産ノ事近付タリトテ、御所ヲ御出アル由ニテ」「御輿ニメサレ、六條少將忠顯朝臣許ヲ召具シテ、潛ニ御所ヲ」出た。しかも、「此體ニテハ人ノ怪メ申ベキ上、駕輿丁モ無」かったので、「自ラ玉趾ヲ草鞋ノ塵ニ汚シテ、自ラ泥土ノ地ヲ踏」む事となる。(注5)

Osaka Shoin Women's University Repository

主上と六条忠顕とは「月待程ノ暗キ夜ニ、ソコ共不レ知遠キ野ノ道ヲ、タドリ」湊を目ざしつつも「心身共ニ疲レ終テ、野徑ノ露ニ徘徊」し、一軒の家にたどり着く。忠顕が「千波湊」への道を尋ねると、内から出て来た「怪ゲナル男」が「心ナキ田夫野人ナレ共、何トナク痛敷ヤ思進セ」たのか、「御道シルベ仕候ハン」と言い、「主上ヲ輕々ト負進セ、程ナク千波湊へ」到着した。この男は「甲斐々々敷湊中ヲ走廻、伯耆ノ國へ漕モドル商人舟ノ有ケルヲ、兎角語ヒテ、主上ヲ屋形ノ内ニ乗セ進セ、其後暇申テ」港にとどまった。この段落は「此男誠ニ唯人ニ非ザリケルニヤ、君御一統ノ御時ニ、尤忠賞有ベシト國中ヲ被レ尋ケルニ、我コソ其ニテ候ヘト申者遂ニ無リケリ」という一文で締め括られている。これは、巻二で阿新を助けた山伏、巻五で大塔宮の危急を野長瀬兄弟に伝えた童（北野天神の眷属たる「老松明神」と明記されている）などとも共通する、説話的要素を担った人物を介在させての場面展開の手法が導入された箇所と見る事ができる。

夜が明けて、舟を出帆させた船頭は「唯人ニテハ渡ラセ給ハジトヤ思ヒケン」神妙・忠勤の態度を見せたので、忠顕も「隠シテハ中々惡カリヌ」と考え、「屋形ノ中ニ御座アルコソ、日本國ノ主、忝モ十善ノ君ニテイラセ給へ。汝等モ定テ聞及ヌラン、去年ヨリ隠岐判官が館ニ被二押籠一テ御座アリツルヲ、忠顕盗出シ進シタル也」と告げ、「出雲・伯耆ノ間ニ、何クニテモサリヌベカランズル泊へ、急ギ御舟ヲ着テヲロシ進ゼヨ。御運開バ、必汝ヲ侍ニ申成テ、所領一所ノ主ニ成ベシ」と言ったところ、船頭は「實ニ嬉シゲナル氣色」となって「取梶・面梶取合セテ、片帆ニカケテ」舟を走せた。

危機が二度あった。一度目は、隠岐判官の舟が接近して来た場面。この時は、船頭が主上と忠顕とを舟底に隠れさせ、その上に乾魚の入った俵を積み、水主・梶取が俵の上に並んで櫓を押し、追手の尋問に対しては「今夜ノ子ノ刻計ニ、千波湊ヲ出候ツル舟ニコソ、京上藺カト覺シクテ、冠トヤラン着タル人ト、立烏帽子着タル人ト、二人乗セ給テ候ツル。其舟ハ今ハ五六里モ先立候ヌラン」との虚言によって追求をかわした。二度目は「追手ノ舟百余艘、御坐船ヲ目ニ懸テ、鳥ノ飛ガ如クニ追懸」けて来た場面。今度は、船頭の「帆ノ下ニ櫓ヲ立テ、萬里ヲ一時ニ渡ラント聲ヲ帆ニ擧テ推」すという努力にも関らず、潮流も逆流し、舟が進まず水主・梶取も慌て騒ぐ。ところが、主上が「船底ヨリ御出有テ、膚ノ御護ヨリ、佛舎利ヲ一粒取出サセ給テ、御疊紙ニ乗セテ、波ノ上ニ」浮かべたところ、「龍神是ニ納受ヤシタリケン、海上俄ニ風替リテ、御坐船ヲバ東へ吹送リ、追手ノ船ヲバ西へ吹モド」し、主上の船は「伯耆ノ國名和湊」に到着する。ここでも神仏の加護による場面展開が描かれる。

港に着くと同時に、忠顕が、「此邊ニハ何ナル者カ、弓矢取テ人ニ被レ知タル」と尋ねると、通行人が「名和又太郎長年」の名を語ったので、忠顕は「勅使ヲ立テ」長年に協力を要請した。酒宴中の長年は「此由ヲ聞テ案ジ煩タル氣色ニテ、兎モ角モ」

Osaka Shoin Women's University Repository

即答できなかったが、弟の小太郎長重が「古ヨリ今ニ至迄、人ノ望所ハ名ト利トノ二也。我等忝モ十善ノ君ニ被レ憑進テ、尸ヲ軍門ニ曝ス共名ヲ後代ニ殘ン事、生前ノ思出、死後ノ名譽タルベシ。唯一筋ニ思定サセ給フヨリ外ノ儀有ベシトモ存候ハズ」と主張したため、長年はじめ一族も同意した。長重は早速、主上のもとに駆けつけ、「着タル鎧ノ上ニ荒薦ヲ巻テ、主上ヲ負進セ、鳥ノ飛ガ如クシテ」船上山へ赴く。長年は「我倉ノ内ニアル所ノ米穀ヲ、一荷持テ運ビタラン者ニハ、錢ヲ五百ヅヽ、取ラスベシ」と知らせて回ったところ、五六千人の人夫が現れ「一日ガ中ニ兵粮五千余石」を運んだ。そこで「其後家中ノ財寶悉人民百姓ニ與テ、己ガ館ニ火ヲカケ、其勢百五十騎ニテ、船上ニ馳參リ、皇居ヲ警固」した。一族の名和七郎は「武勇ノ謀」があったので、白布五百反を旗に仕立て、「松ノ葉ヲ焼テ煙ニフスベ、近國ノ武士共ノ家々ノ文ヲ書テ」方々の峰や木の本に立てたところ、「山中ニ大勢充滿シタリ」と見えた。

第七章は船上山の合戦と主上側の勝利を述べる。船上の城は「俄ニ拵ヘタル城ナレバ、未堀ノ一所ヲモ不レ掘、屏ノ一重ヲモ不レ塗、唯所々ニ大木少々切倒シテ、逆木ニヒキ、坊舎ノ甍ヲ破テ、カヒ楯ニカケル計」であった。しかし、押し寄せた隠岐判官（佐々木清高）・佐々木弾正左衛門（昌綱）の三千余騎は「家々ノ旗四五百流」を見て進攻できなかった。しかも、佐々木昌綱が流れ矢によって死亡、八百余騎の「佐渡前司」は降参、それを知らない隠岐判官は攻撃を続けた。ところが夕刻、「俄ニ天カキ曇り、風吹キ雨降事車軸ノ如ク、雷ノ鳴事山ヲ崩スガ如シ」という天変のために寄手が「オヂワナ、ヒテ、斯彼ノ木陰ニ立寄テムラガリ居タル所」を、名和長年・長重・長生らが急襲。結局、隠岐判官だけが助かって、①「小舟一艘ニ取乗、本國ヘ逃歸リケルヲ、國人イツシカ心替シテ、津々浦々ヲ堅メフセギケル間」、②「波ニ任セ風ニ隨テ越前ノ敦賀ヘ漂ヒ寄タリケルガ」、③「幾程モ無シテ、六波羅没落ノ時、江州番場ノ辻堂ニテ、腹掻切テ失ニケリ」というのである。続けて④「世澆季ニ成ヌトイヘ共、天理未ダ有ケルニヤ、餘ニ君ヲ惱シ奉リケル隠岐判官が、三十余日が間ニ滅ビハテ、、首ヲ軍門ノ幢ニ懸ラレケルコソ不思議ナレ」の一文が付けられている。

「主上隠岐國ヨリ還幸成テ、船上ニ御座有ト聞ヘ」た事で「國々ノ兵共ノ馳參ル事引モ不レ切」という状況が、第七章の後半である。「先一番ニ出雲ノ守護塩谷判官高貞、富士名判官ト打連、千余騎ニテ馳參」ったのを初めとして、「出雲・伯耆・因幡、三箇國ノ間ニ、弓矢ニ携ル程ノ武士共ノ參ラヌ者ハ無」かったし、「是ノミナラズ」、石見・安芸・美作・備後・備中・備前の武士、「此外四國九州ノ兵」までもが、我さきにと馳せ参じたので、「其勢舟上山ニ居餘リテ、四方ノ麓二三里ハ、木ノ下・草ノ陰マデモ、人ナラズト云所ハ無リケリ」という有様であった。

Osaka Shoin Women's University Repository

三

巻七全体を見ると、A「鎌倉幕府の斜陽」と、B「後醍醐天皇の復活」という事が対照的な主題として浮かびあがってくる。Aは、すでに巻一において瞥見しうるものであったが、巻五においては、北条高時個人の問題という形で内部崩壊の予感が語られ、巻六においては、楠正成の見た聖徳太子の『未来記』だけでなく、一鎌倉武士人見四郎入道恩阿の言葉にも、現れていた。巻七になると、「源家嫡流ノ名家」である新田義貞が「平氏」である北条高時の「滅亡遠ニ非ズ」と見て、「義兵」を挙げて「先朝（後醍醐天皇）ノ宸襟ヲ休メ奉ラン」ために「大塔宮ノ令旨」を拝戴する、という形で語られる。そのような令旨を受ける事が可能であったという事だけでなく、令旨を受けた後、「虚病」を理由に戦線離脱ができたというような点にも、大軍を擁しながら、敗北を繰り返す幕府側の素顔を見る事ができるであろう。一方、官軍の方は、大塔宮から楠正成までの〝幅〟として考える事ができる。自らも負傷して血を流し、村上父子の死と引き替えに辛うじて危地を脱することのできた大塔宮と、「元來勇氣智謀相兼タル者」として「少シモサハガズ」状況を「見スマシテ」敵を翻弄し、「兼テ巧タル」作戦を「所存ノ如ク」実行する楠正成とは、官軍の両極を象徴する人物像と考える事ができる。そして、この二人を両極とする〝幅〟の中に、たとえば、赤松や土居・得能だけでなく、無名の「野伏」達が含まれる。実際、新田義貞の執事船田入道が大塔宮への連絡をとる手段として、「己ガ若黨ヲ三十余人、野伏ノ質ニ出立セテ、夜中ニ葛城へ上セ」た事を見ても、官軍側の実態がどのように理解されていたかを窺いうるであろう。

この無名性は、Bの問題にもつながりを持っている。執拗に幕府軍を悩ませて戦い続ける楠正成と大塔宮、それを支えとして赤松や土居・得能のように、官軍漸増の輪が広がってゆく。そういう状況について、佐々木富士名判官義綱から報告を受けた主上・後醍醐天皇は、義綱自身について一度は猜疑心を抱いたものの、隠岐脱出を決意する。この場面については、**別表**のように二系統の文脈が見られる。古熊本系統の本文の場合（義輝本も文飾を除けばこの系統）、官女を下賜された義綱が、その事を名誉に思っただけでなく、官女をも最愛し、ますます主上への忠義心を強く抱いたために、主上も義綱を信用し、脱出の決意を固めた事になる。一方、流布本の場合、義綱は主上への忠義心を持ち、命令を受けて出雲に渡り下準備に取り掛かった矢先に、相談を持ちかけた塩治判官に拘束されてしまい隠岐へ帰れなくなったが、主上はそれにも関らず「運ニ任テ」脱出を決意したという事になる。ただ、古熊本系の本文の場合でも、義綱は実際の脱出行の途中では登場しないので、その「忠烈」は、第七章末尾の、船上山への一番乗りという形でしか表現されないわけである。一方、流布本系の本文の場合、後に「先一番ニ出雲ノ守護塩谷判官高貞、富士名判官ト打連、千余騎ニテ

Osaka Shoin Women's University Repository

別表

流布本	西源院本	神田本・玄玖本	義輝本
判官ハ面目身ニ餘リテ覺ケル上最愛又甚シカリケレバ	判官面目身ニ餘テ最愛斜ナラス	判官ハ面目身ニ餘リテ覚ケル上最愛又甚カリケレハ	叡慮忝サ身ニ餘リケル上此女房容顔美麗ナルノミナラズ情ノ色深〆鹿島ニ懸ル常陸帯結ノ神ノ御計今世一世之契ナラ子ハ偕老眤同穴ノ志等閑ナラス
弥忠烈ノ志ヲ顯シケル	彌忠烈ノ志ヲソ顯シケル	弥忠烈ノ志ヲソ顯シケル	サレハ弥忠烈之志ヲ進メ無レ貳身命ヲ弁ント思エル色隠ナカリシカバ
サラバ汝先出雲國へ越テ、同心スベキ一族ヲ語テ御迎ニ參レト被二仰下一ケル程ニ、義綱出雲ヘ渡テ塩治判官ヲ語フニ、塩治判官如何思ケン、義綱ヲ斗コメテ置テ、隠岐國へ不レ歸			
主上且ク義綱ヲ御待有ケルガ、餘ニ事滞リケレバ、唯運ニ任テ御出有ント思食テ。	主上今ハヨモ相違アラシト思召サレケレハ	主上サテハヨモ相違アラシト被思食ケレハ	主上サテハヨモ相違ハ不レ有ト思召ケレハ

Osaka Shoin Women's University Repository

馳參ル」と記される文との懸隔が見られ、塩冶判官が義綱を拘束した事情が「如何思ケン」としか書かれない辺にも疑問が残る。流布本第六章に唐突な形で登場する塩冶判官は、あるいは「出雲守護」としての一つの立場を表わしていると考える事ができるかも知れない。

そして、主上自身、隠岐島を脱出し出雲に到着する過程においては、六条忠顕とともに自ら歩くというような苦難もあったし、「膚ノ御護ヨリ、佛舎利ヲ一粒取出」して「御疊紙ニ乗セテ、波ノ上ニ」浮かべる事によって追跡の舟から逃れるというような超人的な振舞いもあった。と同時に、そのような主上を支えたのは、忠顕を除けば、「千波湊」まで運んでくれた「怪ゲナル男」にしても、出雲までの舟の船頭達にしても、無名の人物なのである。たとえば、右の「怪ゲナル男」[注6]の登場する段落を義輝本は次のように終結させる。「此男誠ニ只人ニテハアラサリケルニヤ君御一統之時尤モ抽賞有ルヘシトテ國中ヲ尋ラレケレトモ我コソトテ参者ツイニ無リケルコソ不思議ナレ是何様天照太神　正八幡宮聖王ヲ鎮衛シ給テ海山千里ノ外マテモ守セ給ケルニコソト憑モ敷〻覚ヘケル事共也」。ここには、無名性についての一つの解釈が呈示されている事になるが、「怪ゲナル男」にしても、「天照太神・正八幡宮」にしても、〃不思議〃[注7]という点では共通しており、それは又、一粒の「佛舎利」による危地脱出場面にも、船上山攻撃陣の急速な敗退場面にも繋がって行くものである。従って、隠岐判官・佐々木清高の最期を、先取りして語ってしまう箇所（第七章の③④）においても、現世を「澆季」と認識しつつも、隠岐判官の死を「天理未ダ有ケルニヤ」という抽象的論理の中に解消してしまうのである。

なお、例えば、出雲において主上を守護する「名和長年」は、個人名が出ているにも関らず、「長年」個人というより、「長重」「名和七郎」「長生」らを含む集団としての「名和一族」が、「名和長年」という一つの見出し語の形で語られる時もあったと考える事が可能であり、それは、巻三の笠置合戦において活躍した「陶山一族」の例などとも共通しつつ、風刺的狂歌の作者等をも含む、広い意味での無名性という風に言う事ができよう。

ところで、第二章「千剣破城軍事」における楠正成の「心ノ程」について、もう一度確認しておきたい。楠正成方を「見侮テ」大軍で押し寄せた幕府軍に対して、楠方は「少シモサハガズ静マリ歸テ」待ち受け、奇略によって寄手を翻弄する。更に、寄手の水源警備兵が「次第々々ニ心懈リ、機緩テ」「用心ノ體少シ無沙汰ニ」なると、楠は「是ヲ見スマシテ」「夜ニ紛テ」攻撃をしかけ、敗走した敵の「捨置タル旗・大幕ナンド取持セテ」「閑ニ城中へ」引きあげる。翌日、それらを掲げて「ドット笑」って、敵を侮辱し、「安カラヌ事」に思って攻め寄せた攻撃軍に大石を投げかけて被害を与える。ようやく「侮リニク、」思った寄手が攻撃を中止し、城側も一度は「被悩心地シテ、心ヲ遣方モ無」くなるが、ここでの正成は「イデサラバ、又寄手タバカリテ居眠サマサン」と人形を作って寄手を挑発し、攻め寄せ

Osaka Shoin Women's University Repository

た幕府勢を「兼テ巧タル事ナレバ」城に近付け、「所存ノ如ク」大石を投げ落とし、又しても被害を与える。その結果、攻撃の方法を失った寄手側では、遊興中に味方同志の喧嘩から殺し合いにまで発展する「淺猿カリシ珍事」をも引き起こしてしまう。最後には、幕府の命令により、大きな「梯」を作って攻勢に転じた寄手側に対し、楠は「兼テ用意ヤシタリケン」「投松明ノサキニ火ヲ付テ」投げ、「水彈ヲ以テ油ヲ瀧ノ流ル、様ニ懸タ」ため、大梯は炎上し、寄手は皆滅的打撃を受ける。

このように合戦の経過を見て来ると、楠正成の「心」とは、「勇氣智謀」に基づく心理作戦の形をとって表わされるものであり、兵士の数によっては測り得ぬ「心ノ程」ゆえに、やはり「不思議」[注8]なものという事になる。なお、このような「心」は、第四章で赤松貞範が敵の捕虜に対して、殺すことなく「情深ク」遇したという例のような発揮のされ方もあり、第六章における名和長年のごとく「我倉ノ内ニアル所ノ米穀ヲ、一荷持テ運ビタラン者ニハ、錢ヲ五百ヅ、取ラスベシ」という現実的方針を掲げて「家中ノ財寶悉人民百姓ニ與テ、己ガ館ニ火ヲカケテ」主上のもとへ馳せ参ずる例のような発現のされ方もある。

結局、隠岐島から、まず出雲へと帰還した後醍醐天皇は、〝無名〟の人物や〝不思議〟な力に支えられつつ、現実的には西国の勢力を集結させうる原点のような存在として、幕府すなわち北条氏の滅亡を加速させる形で、物語の中に復活したのである。

（注）

1 引用は日本古典文学大系本（岩波書店）による。

2 傍点は筆者。以下同じ。傍点を付した語句には、作者の論理を窺う事ができるものが多い。

3 神田本・西源院本・玄玖本は「不思議ナレ」、義輝本は「イサマシケレ」。

4 義輝本は第五章と第六章とを分けず、「告タリケル　六波羅北早馬ニ驚テ畿内」と続ける。

5 以下、本稿では、「先帝」ともある後醍醐天皇を、本文中の「主上」という語に統一して使用する。なお、大森北義氏は「後醍醐天皇が反幕府運動の象徴として意味と機能をもち始めようとする時点からは、「主上」という呼称を公然を使用していくのである」と述べておられる（「『太平記』の構想と方法」・第一章〈明治書院・昭和63年〉）。

6 野津龍『隠岐島の伝説』（鳥取大学教育学部国文学第二研究室発行・昭和52年7月10日）には、この脱出をめぐって、地名伝承などとともに、天皇が日ごろ信仰していた「美田八幡宮」の神が翁姿となって現れて守護したこと、「西ノ島町美田字小向」の「面屋」（屋号）の先祖にあたる「地蔵兵衛」という「三十三歳で八人力、六尺に余る男」が手助けをしたが、「帰途台風に遭って死んでしまった」という伝承も紹介されている。

7 「不思議」という語については、拙稿「『太平記』における「不思議」の一解釈」（『解釈』第19巻第10号）で論及した事がある

Osaka Shoin Women's University Repository

が、大森氏は『太平記』の「二つの方法」として、〝「序」の方法〟と〝「不思議」の方法〟とを提唱された。注5参照。

8 注3に記したように、流布本の「不敵ナレ」、義輝本の「イサマシケレ」という価値判断を明示した形よりも、古熊本の「不思議ナレ」の方が、楠正成像のスケールに合ったものと言えよう。